プロフェッショナルの肖像 Vol.6

プロはテレビの中にだけいるのではありません。医療という不確実な仕事の現場で、常に結果を求められ、それに応えるべく日々研鑽を積んでいる長崎医療センターの医師に訊きます。
聞き手：小森敦正（難治性疾患研究部長）

錦戸　雅春（泌尿器科部長）

第6回目は、錦戸先生泌尿器科部長
長崎県出身。1984年長崎大学卒。同年長崎大学泌尿器科入局。平成29年より長崎医療センター勤務。専門は腎腫瘍、腎不全、腎移植、血液浄化療法。
淡々とした優しい語り口で、長崎県の泌尿器科医療30年史を伺ったような気がしました。

腎移植手術

医師を目指した動機を教えていただけますか。

幼い頃病気がちで色々な科の先生方にお世話になっていたことが理由にあります。高校で理系クラスにいたのですが、物理や数学が苦手で、理工系ではない理系の職業という少し消極的な背景もあります（笑）

泌尿器科を志望された理由は何ですか。

学生時代に腎臓に非常に興味をもち、腎臓専門医になりたいと思っていました。腎臓内科と泌尿器科を迷いましたが、腎不全を考えた場合、移植を含めたトータルな治療がしたいと考え、泌尿器科に入職しました。

大学院時代　日本透析医学会（横浜）

泌尿器科に入局され33年間の腎不全医療の変遷を教えていただけますか。

入局当時の透析の機器は不十分なもので、透析治療は苦痛な時代でした。若い人が透析に入ると半分は亡くなるという悲惨な現状の中、それを救えるのが移植ということで、モチベーションを高くもち取り組んでいきました。現在は透析技術もずいぶん進歩し、また原疾患も糖尿病や高齢者の腎硬化症の方が多数透析を受けておられます。

腎移植の変遷も教えていただけますか。

私が入局した1980年代前半は免疫抑制剤がステロイドとイムランしかなく、献腎移植をしても、1年の生着率が半分くらいでした。1986年にシクロスポリンが登場したことで、飛躍的に予後が改善し、現在生体腎移植の10年生着率が80％をこすようになっています。薬剤も進歩し、血液型不適合、先行的腎移植、高齢者、糖尿病の方の腎移植など多様な選択肢が増えてきました。

長崎県の腎移植は多いのですか。

長崎県の腎移植の歴史は日本の中でも古く、1965年が第一例目で昨年末までで356例です。特に長崎は献腎の比率が4割～ 5割と高いのが特徴です。献腎提供の推進に関しては大先輩の進藤先生や松屋先生が長年力をいれて活動されて、長崎県の救急や脳外科の先生方の多大なるご協力により、全国平均の3倍～5倍の提供数があります。私も微力ながら色々なところを回ってご協力をお願いしてきました。現在長崎大学と当院とで1年で15例前後の移植を行っており、多様な生体腎移植にも対応しております。

学会で恩師の進藤和彦先生、原田孝司先生と

低侵襲手術にも力を入れてらっしゃいますね。

腹腔鏡下腎摘出術は泌尿器科で当初より関わらせていただき、私が執刀した腹腔鏡手術は300例を越えております。長崎県下では最も症例経験が多いのではないかと思います。もっぱら最近は関連病院で若い先生方の技術認定医取得の指導をやって参りました。

泌尿器科への入局数も増えているみたいですね。

数年前より教室全体として泌尿器科の魅力を伝えて、フォローして行こうという取り組みを強化したのが背景にあるのではないかと思います。当センターでもスタッフみんなで一生懸命研修医の指導に当たったのが今につながり、興味をもって入局いただくケースが増えてきたのかなと思います。

血液浄化療法部の先生方と

泌尿器科の魅力はどのようなところですか?

担当する領域が幅広いところですね。腎臓を中心に色々な臓器につながり、一般泌尿器科のみならず腎不全・腎移植から副腎や副甲状腺などの内分泌外科まで多岐に渡ります。研修医、学生の方々からも「こんなに多岐にわたる治療をしているのですね」と実際研修して驚かれます。

診療のモットーを教えてください。

若き日の、松屋先生と透析室で

患者さんが元気になるためベストを尽くすことです。また毎日患者さんをよく診ることです。腎移植を主にしていましたので、昔は患者さんの状態の小さな変化やデータの微妙な動きを1日見逃してしまうと拒絶反応や合併症で移植腎を失うことになっていました。先輩の先生からも毎日よく診ることの大切さを指導していただき私の現在のモットーにもなっています。癌の患者さんはもちろん、腎不全で苦しんでいる方が元気になり喜んでいただけることが、何よりの生きがいであり大きなモチベーションです。

ワークライフバランスはいかがですか?

たまにではありますが、ゴルフをやったり、家族と波止釣りをして、リフレッシュしています。

長崎医療センター泌尿器科での今後の展開を教えてください。

当センターは救急病院でもあり、大学レベルの専門性の高い医療も提供しなければならないという両面性をもった、やりがいのある病院だと思います。今後腎移植の症例数ももっと増やしていきたいと考えておりますが、自分の専門領域だけでなく、トータルな泌尿器科のプロフェッショナルにもなりたいと思います。

また色々な科の先生方と連携して横の繋がりも深めていきたいと思っています。

最後に若い先生に向けてメッセージをお願いします。

若い先生方にはしっかり患者さんと向き合い、よく診てほしい。患者さんの病気を診るのではなく、患者さん全体をよく診てほしい。

泌尿器科は先輩後輩の垣根も低く、家庭的な雰囲気です。たくさんの若い先生に泌尿器科を研修していただき、患者さんから「先生に診てもらってよかった」と言ってもらえるように一緒に頑張っていきましょう。

本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。